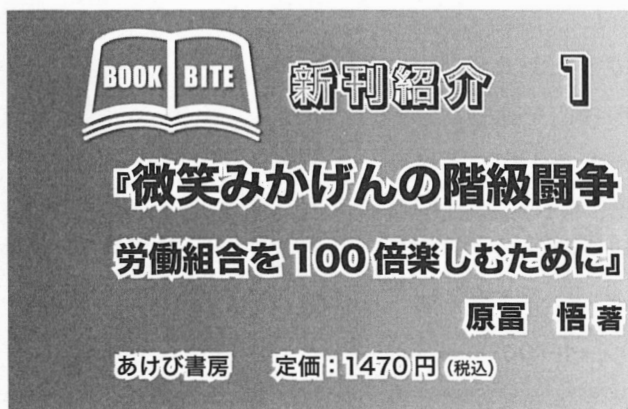




この一冊、原富さんを知る人も知らない人も読んで欲しい。原富さんを知る人は、さらに知ることになるし、知らない人は情熱と正義に生きる原富さんに感動するであろう。タイトルが彼らしいのであるが、「微笑みかげん」とは笑顔ではなく、労働者の微妙な心理を切り取っている。すぐれた活動家は、この微妙な揺らぎを捉えることに優れていなければならないが、原富流の心模様の切りとり方が面白い。私などは、大阪流の笑いしか知らず、現役を退いてからは「笑長久」であればと考えている程度だが、彼は「微笑みかげん」を一冊の本に仕立て上げてしまった。

この本の魅力は、労働者向きテキストであるようだがテキストでない。組織拡大活動を解説するものはあるが、この本では、組織化オルグの基本を学べることは勿論だが、人間・原富を学べるのである。たぶん彼は自分史を書き、すべてを露わにすることで、「労働運動の魅力」に読者を引き込もうとしたのではないか。それにしてもヨメさんとの二人三脚ぶり、ごちそうさまである。

最大の魅力は、労働組合組織論と社会運動論を楽しく論じている章である。原富さんは埼玉土建組織を、県民30世帯にひとりとは埼玉土建の組合員という水準にまで押し上げた人物。そ

の組織拡大戦略が語られている。

「労働組合文化」と称した新たな創造課題の提起が、労働者の組織化運動を粘りつよい取り組みに変えている点が学べる。5つのカ

テゴリーである。労働組合を主語に、「すべての働く人を仲間と考える」「民主主義の訓練をする」「社会正義に立脚する」「人間的な労働者のなものに関心を払う」「労働組合にとっての前進」を提起する。ややもすれば組織拡大を目標数と拡大作戦に焦点を当てがちであるが、組織拡大を粘り強く追求する思想が全体のものとなっている。もちろん、組織化運動の失敗と成功が豊かに教示されており必読である。

「^{そうもうくつき}草莽崛起」という吉田松陰の言葉を教えられた。現代風には、「身分の差別なく、平民も一緒に立ち上がろう！」というシュプレヒコールなのか。ここでは、労働組合と社会運動の結合を熱く語っている。現在も埼玉社保協副会長であるように、労働運動と地域運動を結びつけて、埼玉の民衆運動に貢献している。実は、私もここが日本社会を革新していくうえでキーポイントだと考えている。私は労働組合の地域力構築には、地域における調査と政策化、政治への働きかけという「3つの立脚点」を意識しているが、お互い「微笑みかげん」で楽しんでいるようである。多くの方に読んでほしい一冊であり、人生にいかしてほしい一冊である。

(服部信一郎・会員・大阪革新懇事務局長)

